



昼寝の町



川崎ゆきお

真夏の昼下がりに、通りには人っ子ひとり出ていない。川沿いに小さな町がぽつりぽつりとある。川と山の幅により、その膨らみに合わせたような町々だ。昔なら村だろう。ただ、今は普通の住宅やちょっとした工場が建ち並んでいる。狭い道をたまに砂利を乗せたトラックが走っている。

「誰もいない」

その小さな町のメイン通りを広田は歩きながら呟く。セールスで来ているのだ。車は川沿いの余地に適当に止めている。

日差しがきつく、通りは日陰がない。広田は何軒か回ったが、中の人には出てこない。やっと一人だけ出たのは子供で、それによると、この時間は昼寝中らしい。だから、訪ねて来る人もいないとか。宅配便もこの時間は寄りつかないようだ。

家にいる人は昼寝中かもしれないが、町そのものが昼寝で休んでいるわけではないはず。ところが、やっと見つけた食堂のような喫茶店も、シャッターが半分閉まっている。そして準備中の札も。

広田は店内を覗くと、店の人らしい人がいる。そして、客席で寝ている。

この暑苦しいのに布団屋に寄る気はないが、潰れずに残っている古い布団屋があった。ここだけは開いているのか。シャッターは降りていない。元々シャッターなどない店なのだろう。表のガラス戸が全部開いている。店内は丸見えだが、薄暗い。

広田は通りがあまりにも暑いので、店内に入った。

「いらっしゃい」

店の人がいる。昼寝していないのだ。

出てきた親父はステテコにランニングシャツ。その合わせ目に腹巻き。伝説の服装だろうか。そんな格好で接客する人がまだ、この町にはいたのだ。

広田はセールスをかけようとしたが、暑さでやる気が失せている。

「暑いですねえ」

「何をお探しで」

厳しくきた。これは買わないと怖い。

まさか布団を買うわけにはいかないのだから、ウチワを買った。こんなものは何かのイベントへ行けば景品で貰えそうな品だし、百貨店でも売っている。

「この辺りのお家はみなさんお昼寝中ですか」

「ああ、そうだよ」

「でもご主人は起きておられる」

「昼寝には寝具がいるだろ。まあ、滅多に出ないけどね。シーツやカバー類、タオルケットはよく出るよ。ヒヤヒヤシールもね。昼寝中でも買いに来る人がいるんでね。だか

ら開けているんだよ」

広田は町の大きさと布団を買う客とをざっと計算したが、食べていけないだろう。実際に売れているのは百均にあるような雑貨のようなものだ。

すると、布団で食べているのではなく、他に何か仕事をしているのだろうか。それにしても、このステテコに腹巻きスタイルでは、サイドビジネスはかなり狭められる。

「暑いから気をつけてね。若くても熱中症にかかるからね」

そう言われると、もう店の中で涼んでいられなくなった。ウチワ分だけの短い避暑だ。

この町では仕事にならないと思い、広田は車まで戻ることにした。

止めていた川沿いに出ると、多くの車が止まっていた。中を覗くまでもなく、昼寝中のような様子だ。

了